

## 慶 州

八月一日午前四時——ボーイのモーニング・コールで目をさました。石仏寺の石窟庵へゆくために、前夜フロントにそれを依頼しておいたのである。一行は貸切バスに乗って、四時四十分ホテルを出た。案内は日本語に堪能な李信雨氏である。師範学校を出て、長く教職にもあったというので、年は五十恰好と見受けられた。名刺には「国立慶州博物館指定・交通部長官免許・観光通訳案内（日本語）」という肩書がついていた。昨日、ソウルから釜山空港まで迎えにきてくれた「韓進」の観光バスの運転手は、これからソウルまでの長途の運転がひかえているので、ゆとりく睡眠をとってもらうことにしたが、ガイドの一人の林春子さんだけは、「責任がありますから」といって、わざわざ同行を買って出てくれた。

まだ夜深い慶州の町は、深い闇の底にあった。灯の乏しい古都は、一入悲しい町に思えた。石窟庵のある吐含山に通ずる道路が、観光客の便をはかって補修されつつあるところで、小型ブルドーザーが所々におかれ、バスは土ぼこりをあげながら、凹凸のはげしい道を進んだ。ほの白み

かけた東の空を背景に、ポプラ並木のシルエットが浮び、その切れ目から、遠く灯が一点見えた。路傍の一軒家で、早起きの主婦の朝餉あまけの仕度か、あかあかと燃え立つかまどの火に、その顔が一瞬照らし出された。

バスは仏国寺前までしか行かない。終点に近づいたころ、窓をすかし見るようにしながら、李さんは「あの稜線に電灯の見える所が石窟庵です」という。指さす方向を見上げると、なるほど、稜線に沿ってともる、一点の灯火を見た。その右手の上空には、折から明の明星がまたたいていた。私には、石窟庵の電灯が、天上の星のまたたきに答える地上の星のそれに思えた。瞬間、神秘的ものが一筋五体を突き抜けるのを覚えた。

バスを降りたとき、時計を見ると、ちょうど五時であった。それから、石窟庵の入口前の広場まで、約二キロの登り坂である。花崗岩のかげらの散らばる、かなり足もとの悪い道を、ほのぼのと明けゆく朝の冷気に肌をさらしながら、登っていった。路傍には、咲き初めの野萩の花が到る所にあり、紅色の鮮やかな合歓ねむの花が頭上に蔽いかかるように咲いた所もあった。一行の過半数は女子短大生で、途中元氣よく私を追い抜いてゆく者もいたが、けっきょく広場への一番乗りは、同行中一等年嵩としかさの一人である私であった。五時三十分、広場はすでに数十名にも及ぶ人が登っていた。アメリカ人らしい一人を除いては、すべてこの国の人のようであった。それに、われわれの一行の五十余名が、つぎつぎと加わってきた。人々は、一様に今朝の日の出を見ようと、

広場の東側に張りめぐらされた柵に沿って集まっていた。しかし、晴天であれば、日本海の水平線から昇る蔽かな日の出を迎えるはずであるが、今朝はあいにく幾重にも雲が淀み、まだ太陽の姿を捉えることができない。五時四十分ごろ、やっと厚い雲の切れ間に、赤茶けたその輪郭を認めることができた。

五時五十分、一行の人数がそろったところで、入場の手続きをとり、約六百メートル離れた石窟庵へ向かった。松・楓・櫟などの、日本でも見馴れた樹木を縫って通ずる、比較的平坦な道であった。十分も歩いたとき、道が左折し、急に山ふところらしい空間がひらけ、真上に石窟庵の前室の瓦屋根が仰がれた。そこまでは五十メートルばかりの急坂があったが、坂へかかる手前には、重畳する巨岩の間から湧き出る清水をたたえて、手をすすぐしつらいもしてあった。

前室は、壁と扉の唐草模様との白を除くと、円柱も蓮子窓も、唐草模様を白く浮き出した扉の地の部分も、すべて朱塗りであった。

入口は、左右それぞれ一枚ガラスの観音開きになっており、中にいる人の姿が外からも見えた。入口の傍には、韓国風の法衣をまとった若い僧が立っていた。私はかれに目礼してガラス戸を排した。前室から扉道に第一步を踏み入れたとたん、思わす私は立ちすくんだ。巨大な仏陀の像が、前面を蔽うように、突然現われたからである。それは、「突然現われた」としか言いようがないほどの、意表をつく速さだった。私は身の置き所もないような、奇妙なとまどいを覚えた。まだ

十分心の準備もとのわないうちに、先方からいちはやく姿を現わしてきたからであろう。

思えば、この仏像の不思議な魅力が、私に今回の旅を思い立たせたのであった。いや、正確に言えば、ひと月前に、柳宗悦氏の『朝鮮とその芸術』とりわけ、その中に収められた「石仏寺の彫刻に就いて」を読んだことが、決心の直接のきっかけとなったのであった。少なくとも、この文章にふれなかったら、今夏の渡韓は実現しなかったかも知れない。だから、仏像の魅力とは、柳氏の文章によって私の心に描き出された仏像の幻影の魅力であったといってもよい。その仏像に、今の現まに私は対面したのである。高さ三・四メートルの釈迦の座像が、直径六メートルのドーム型の窟室の中央に蓮台を据え、その上に安置されている。左肩から斜に法衣をまとい、結跏趺座した釈迦の首には、はっきり三道が現われ、手は降魔の印を結んでいる。額の白毫は、もとダイヤモンドを鑲ちりばめたものであったが、それを失ってからは水晶をもって代え、今はそれをさらに金箔をもって包んでいる。前室が取り付けられるまでは、春秋それぞれの彼岸を中にした一時期には、東海に昇る太陽の光がそれに正中し、その反射で、窟室内は一瞬仏土の淨光に充たされたと伝える。さもありけんと、ごく自然に想像することができた。それでも、私の前に立ち現われた釈迦像は、ガラス戸を透して射し込むさわやかな朝光を浴び、白花崗岩の面輪は、神々しさの中に、えもいわぬ親しさをたたえていた。狎なれることを厳しく拒みながら、あらゆるものを吸い寄せずにはおかないものを、それは持っていた。両眼は薄く閉じられ、豊麗な両頬に挟まれ

た唇の薄紅が、ほのかな艶を帯びていた。額づきたい気持よりも、いつまでもまともに仰ぎ対していたような、そうしていることに現世の至福を満身に覚えるような、そんな仏様である。かつて味わったことのない体験であった。

私はやがて、釈迦像の真後ろの石壁に浮彫りされた十一面観音像の前に立っていた。巨大な本尊の陰に、つつましくやさしい微笑を湛えたこの立像は、私のまたつよくあこがれてきた幻影の像であった。肉体が透かし見られるような薄衣の流線の美しさ。腰からやや離れて垂れた右手の人差指の陰から忽然と現われ、両脛の前を弧を描いて横切り、やがて左の脹脛に吸い取られるように消えてゆく瓔珞の美しさ。そこには、花崗岩という材質はすでに消滅し、繊細・優雅な美そのものがあつた。このような芸術に接した記憶も、私の体験の中に探り当てることはできなかった。

古記録によると、この石窟庵は、統一新羅第三十五代景德王の即位十年（七五二）、時の丞相大我によって造立されたものという。その後、災害・戦禍をも免れ、仏教受難時代をもくぐり抜けて、窟内の諸仏を、ほとんど完全な姿で今日に伝えていることは、いかなる形容も及ばぬ、無上の歓喜である。

私の心を捉えた、柳宗悦氏の一文「石仏寺の彫刻に就いて」の冒頭の一節は、主として釈迦如来像と十一面観音像とに、はじめてふれた瞬間の感動を短叙したものである。今それをつぎに抜書きしておく。

今から三年前——千九百十六年（大正五年）九月第一日午前六時半、うららかな太陽の光が海を越えて、窟院の仏陀の顔に触れた時、私は彼の側に佇んだのである。それは今も忘れ難い幸福な瞬間の追憶である。彼及び彼を囲繞する諸々の仏像が、その驚くべき晨の光（あした）によって、鮮かな影と流れる様な線とを示したのもその刹那であった。窟院の奥深くに佇む観音の彫像が、世にも稀な美しさに微笑（さほえ）んだのもその瞬間であった。只この晨の光によってのみ見られる彼女の横顔は実に今も私の呼吸を奪ふのである。

バスを待たせてある仏国寺まで、帰ってくると、時刻はすでに八時に近かった。朝食前の登山であったが、これからの観光の道順からいって、仏国寺の参拝をここですましておく方がよさそうだというので、スケジュールの一部が変更されることになった。

多宝塔と釈迦塔のある山内に通ずる道の傍に、ひととき鮮やかな紅の花をつけた合歡の大木が目にとまった。その根方には、この国の到る所で見につく木槿（しくげ）が紫の花を開いていた。木槿は韓国の国花だと、ガイドから聞かされた。

そのうちに、蟬時雨の木立を通して、石を切る音がきこえてきた。それは、相当大勢の石工が、同時に揮う槌の音であった。仏国寺で目下大修理が進行中であることは、あとで知った。その音が、私の耳には、数々の花崗岩の芸術を今に遺す古都慶州の歴史を奏でる音楽のようにきこえるのであった。